

「助産士」問題の意識調査

著者	佐藤 喜根子, 片岡 千雅子, 白井 富久子, 小山田 信子
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	7
号	1
ページ	53-58
発行年	1998-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33657

「助産士」問題の意識調査

佐藤喜根子, 片岡千雅子, 白井富久子, 小山田信子*

東北大学医療技術短期大学部 専攻科助産学特別専攻

*東北大学医療技術短期大学部 看護学科

Questionnaire Studies on the Male Midwife Issue

Kineko SATO, Chikako KATAOKA, Tokuko SHIRAI and Nobuko OYAMADA*

Course of Maternity Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University

**Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University*

Key words: 助産, 男女平等, 保健婦助産婦看護婦法

In recent years it has been alleged that men and women have equal rights. As the midwife is one of the occupations which only women can be approved to be licensed and it is said that it is unfair for men who have intention to obtain the license, this has been one of the issues of peoples discussion lately. However, the work of the midwife includes not only service concerning preservation of health and counselling of women which are deeply related to women's life cycle but touching directly women's genitals during the pregnant period and at the delivery process. Therefore, participation of men in the occupation of the midwife has been hardly acceptable to women as the service receivers in particular.

Consequently, we used a questionnaire to survere attitudes of women as the service receivers, expecting women, midwives, nurses (male) and male student to be nurses within Miyagi prefecture to participation of men in the occupation of the midwife. The result is as follows.

- ① Looking as a whole, many people objected to the male midwife.
- ② Regarding the item of "preservation of health", the percentage of approval was high ; 36-37%. On the other hand, concerning the items of "assisting at the delivery process" and "breast massage", many people showed disapproval.
- ③ Those who wished to participate in the service of the midwife were male nurse and male students to be nurses.

はじめに

男女が平等で共生できる社会づくりが叫ばれている昨今であるが、現在女性に限定した資格取得である助産婦の男性への開放が問題となっている。1993年保健婦助産婦看護婦法の一部改正により翌'94年に保健士が誕生した。同時期に助産士(助産婦と同じ業務を実施する男性)導入も検討さ

れたが、受け手である女性の反対も大きく、その業務内容から社会的なコンセンサスが得られず、時期尚早であると見送りになっている¹⁾²⁾。それ以来賛否両論の議論が続けられているが結論はでていない。これまでの「助産士」導入についての論議は、そのロジカルタイプを男女平等論、性別役割論、就業仮定論に分類・整理することが出来るとされている³⁾。そこで今回受け手である一般女

性（出産直後の褥婦）と助産婦，そして助産士を希望する可能性のある看護師と看護士学生を対象に主に男女平等論，性別役割論，そして感情の相違から，助産士導入の賛否の意見に影響を及ぼす因子を探ってみた。

調査対象と内容

対象者は宮城県内の産婦人科を設置する病院・診療所 12 施設の助産婦 490 名，同施設で出産し入院中の褥婦 250 名，産婦人科の有無に関わらず宮城県内の病院・診療所で働く看護師 81 名，教育施設に学ぶ看護士学生 49 名である。このうち回答数は，621 名（有効回答率 71.3%）であった。内容はその属性を知る為年齢，性別，所属，在職（学）年数と「助産士」導入の立法改正への賛否意見，そしてその理由が分析出来るような項目とした。賛否意見の分析には男女平等観，性別役割観，感情的なもの，助産士の可能性等を含む 21 項目を混在させた。対象者には「非常にそう思う」から「非常にそう思わない」の 5 段階で回答してもらった。

調査結果

1) 対象者の属性と「助産士」賛否の相違

所属別による対象者の内訳は褥婦 115 名，助産婦 401 名，看護師 60 名，看護士学生 45 名であり，平均年齢は褥婦 30 歳，助産婦 34 歳，看護師 37 歳，看護士学生 22 歳であった。対象者の在職平均年数は助産婦 10.6 年，看護師 11.9 年であり，看護士学生は 1 年 16 人，2 年 15 人，3 年 14 人であった。

対象者 621 名中，女性 516 名，男性 105 名である。性別による「助産士立法化」賛否は，賛成は女性 32.6%，男性 59% であり，反対は女性 59.3%，男性 33.3% であった（図 1）。これを χ^2 検定で分析

した結果，女性は男性に比べて「助産士」導入は有為に少ない結果であった（ $p < 0.01$ ）。

所属別による「助産士」導入の賛成の割合は，高い順に看護師 60%，看護士学生 57.8%，褥婦 42.7%，助産婦 29.7% であった。所属による意見の相違を χ^2 検定で分析の結果は，助産婦と看護師・看護士学生の間にはそれぞれ有為差（ $p < 0.01$ ）があり，褥婦と助産婦・看護師との間にもそれぞれ有為差（ $p < 0.05$ ）があった（図 2）。

性別による「助産士」導入賛否の相違が大きいことから，各所属毎の年齢別による賛否の相違を調べた。その結果褥婦と看護士学生は性質上 20-30 歳代に限定され，年代別の差の検定は不能であった。一方，助産婦は賛成意見の多い順に 50 代 30 代 20 代 40 代であり，看護師は 50 代 30 代 40 代 20 代の順で，それらの意見の相違を χ^2 検定で分析した結果，同じ職種での年代間に差はみられなかった。しかし看護師の 30 代と助産婦の 20・30・40 代との間には有為差がみられた（ $p < 0.01$ ）。また看護師の 20・40 代と助産婦の 20 代との間にも有為な差がみられた（ $p < 0.05$ ）。

2) 所属別みた男女平等論の相違で「専門職

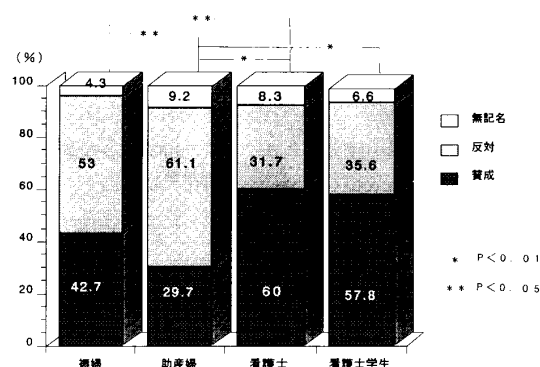


図 2. 助産士導入立法化の賛否

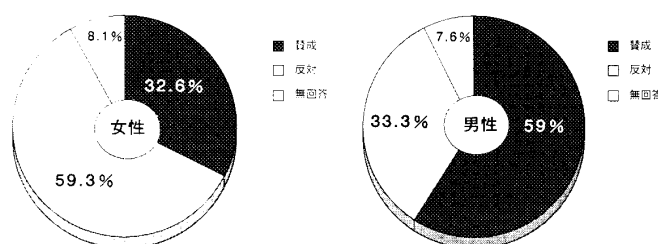


図 1. 助産士立法化の賛否

なので差別は考えなくてよい」では、看護師の55%が「そう思う」という肯定的意見で、看護士学生と褥婦が44%、助産婦が36%であった。しかし、褥婦の30%が「どちらでもない」と回答していた(図3)。また、「職業に男女の差があってはならない」では、「そう思う」とする肯定的意見が看護士学生に多く62%、次いで看護師57%、褥婦47%、助産婦35%であった。また「どちらでもない」の思案組は助産婦32%、褥婦31%であった。これらは助産婦と看護士学生の間に有為差があり($p<0.01$)、また助産婦と看護士・褥婦間にも有為な差が認められた($p<0.05$) (図4)。

3) 性別役割論のレベルからみると、「男性が加わるところで助産業務が向上する」という男性看護者レベル向上論では、「そう思う」という肯定的回答は、看護師35%、看護士学生36%と多く、反対に「そう思わない」という否定的意見は助産婦32%、褥婦29%であった。しかしどの所属群も40%以上が「どちらでもない」と回答している(図5)。また、「男女両方いる方が選択の幅があつてよ

い」という両性相互補完論では、「そう思う」という肯定的意見は看護士学生が54%と圧倒的に多く、次いで看護師の39%であった。反対に「そう思わない」という否定的意見は褥婦38%助産婦32%であった(図6)。

また「夫への保健指導が効果的に行える」という男性特性期待論では、ほぼ全所属で「そう思う」と肯定的意見が多く、概ね70~80%を占めた。特に学生の87%は群を抜いていた(図7)。反対に「分娩介助」と「乳房管理」という助産業務特殊論

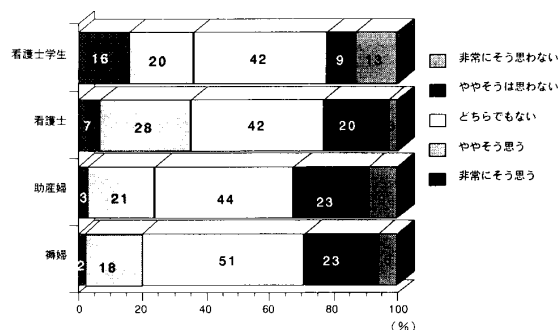


図5. 男性が加わることで助産業務が向上する

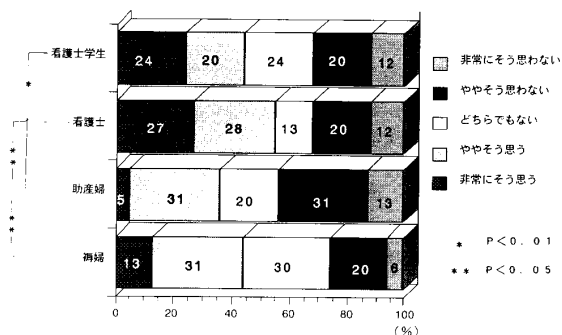


図3. 専門知識を備えた専門職なので男女の差別は考えなくてよい

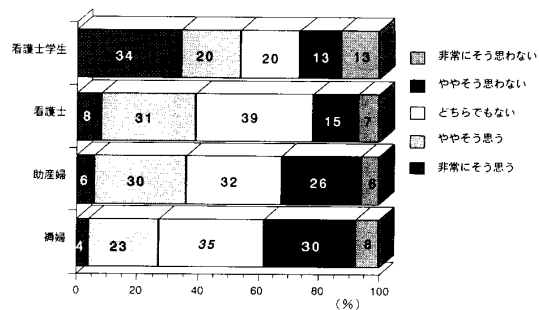


図6. 男女両方いる方が選択の幅があつてよい

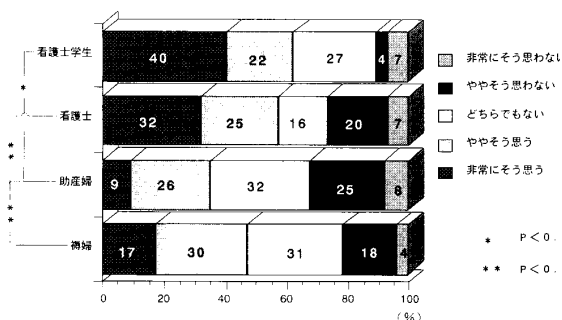


図4. 職業に男女差があってはならない

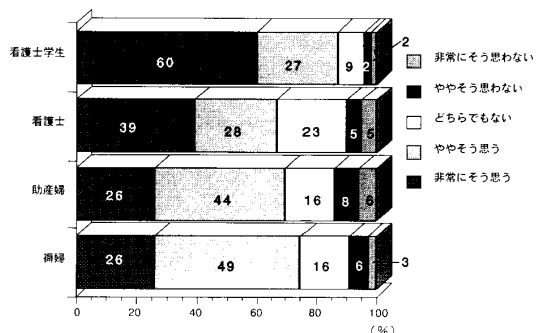


図7. 夫への保健指導が効果的に行える

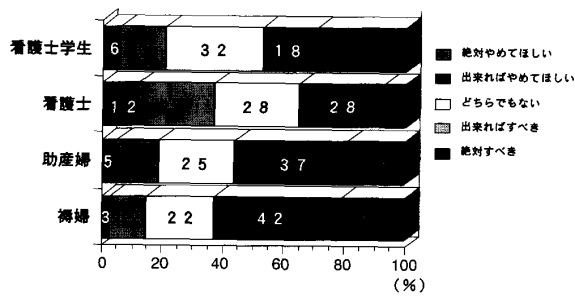


図 8. 分娩介助

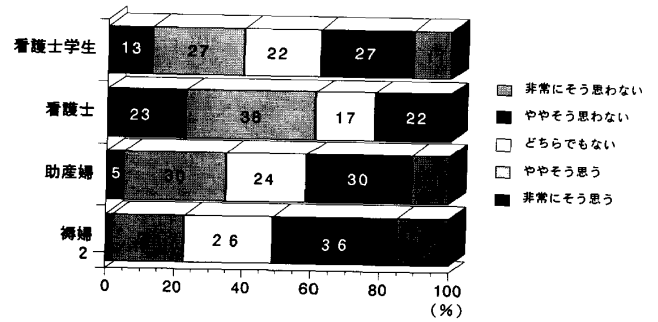


図 11. 女性の身体や心理は男性に理解できない

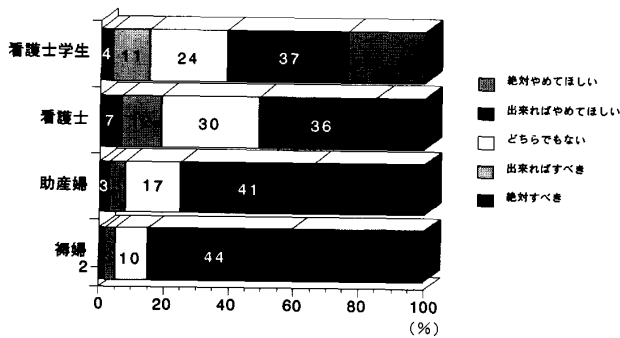


図 9. 乳房管理

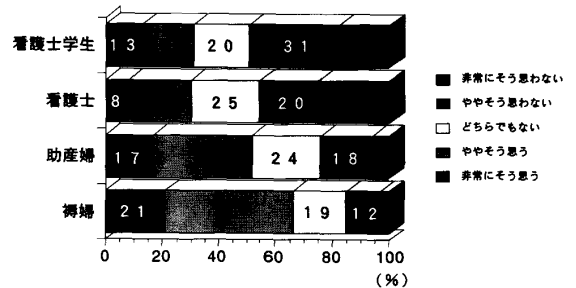


図 12. 恥ずかしい

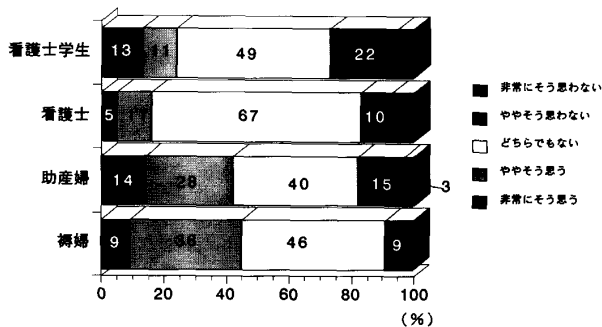


図 10. 男性の方が妊婦・産婦にやさしい

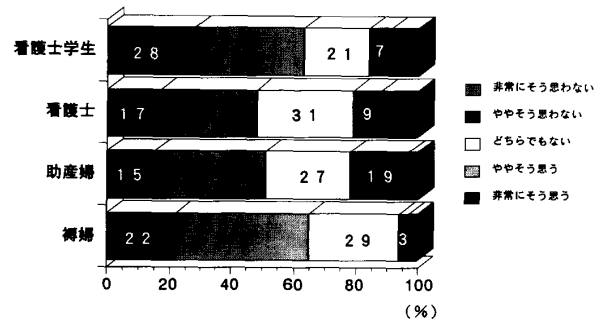


図 13. 男性がいるとリラックスできない

では、全所属群で「やめてほしい」と否定的な意見が半数以上を占め、特に褥婦では「乳房管理」の85%が否定的であった（図8・9）。

また「男性の方が妊婦・産婦にやさしい」という、対女性への性格的なものでは、女性である褥婦と助産婦は「そう思う」が43%もあり、男性である看護師や看護士学生の2倍以上を占めた。そして「そう思わない」は全くその逆であった（図10）。

一方「女性の身体や心理は男性に理解出来ない」とする質問に対しては「そう思う」が褥婦と助産婦が29%。看護師と看護士学生が50.5%と、やは

り女性の身体や心理の特徴的な部分をむずかしいものにとらえている男性が多かった（図11）。

4) 所属別にみた感情の相違では、助産士が導入されると仮定した場合「恥ずかしい」は、圧倒的に褥婦と助産婦が多く全体の50～70%を占める。反対に「そう思わない」と答えたものは看護師、看護士学生で50～60%と全く逆の形となった（図12）。

また「リラックス出来ない」は褥婦と助産婦では50～65%を占めた。他方看護士学生も63%が「そう思う」と答えている（図13）。

考 察

性別からみた「助産士」導入の賛否意見では、受け手である女性が男性より反対意見が有為に高いのはこれまでの他の文献とも同じ傾向であった^{4)~8)}。この原因はケアの受けて側である女性がまだ否定的に捉えているためと考えられた。所属別でも性別と同じ男女比となっており、同じように考えられる。

また年齢層別に見ると、社会変化を抵抗なく受け入れやすいと思われた20代よりも、比較的高い年齢層に賛成意見の多い傾向が見られ予想外であった。年代別「助産士」導入の賛否では、看護師20代・30代・40代と助産婦の20代・30代・40代の間で差が大きく、助産婦が職業上の性をより強く意識しているように思われた。

次に男女平等論の視点での、「専門知識を備えた専門職なので男女の差は考えなくてよい」という設問は、「専門職をどう捉えているか」という評価にも通じると考えられる。看護師の過半数が肯定的に捉えているものの、褥婦・助産婦・看護師学生は半数以下にとどまり、助産婦ではむしろ否定的な意見が多い。これは今だ助産業務は専門職といえども男女平等は成り立たない職業でもあるという見方をしているためと考えられた。

一方「職業に男女差があってはならない」の設問に於いて、看護師学生が最も肯定的意見が高いのは、制度上の平等を権利として捉えたためと考えられる。これに対して助産婦の肯定的意見は少なく「どちらともいえない」の32%とあわせて考えると、業務内容を知っているがゆえに単なる制度的な平等の権利としてだけでは受け止められない為であろう。現在の助産業務に男性が加わることで「レベルが向上する」という考えには助産婦・褥婦は比較的否定的であり、看護師と看護師学生でも35~36%しか肯定的に捉えていないことは意外に思われる反面、現在の助産婦という職業が専門職として深く定着し、又評価されているためであろう。しかし、このように看護師・看護師学生に肯定的意見がみられるということは、今後職域を広げていこうとする意欲が伺える。それは「男

性両方いる方が選択の幅があつてよい」とする設問での看護師学生の過半数以上の肯定的意見からも理解できる。このような性差を越えた専門職としての助産業務を望む看護師及び看護師学生の意見は、その実現に向けて現実的には、受け手である女性にスムーズに受け入れられるためには、多くの困難があると考えられる。

また性役割論では男性の特性が期待できるのではないかと仮定した「夫への保健指導が効果的におこなえる」では期待通りであった。このことは保健指導という枠内とすれば助産士が加わることで、さらに助産職の活動領域を広げることが出来る可能性を示唆している。

他方「分娩介助」や「乳房管理」等の助産業務特殊論⁹⁾では、全ての所属群で否定的意見が多いのは、これまでの結果とも一致した^{4)~8)}。この否定的意見が出てくる要因をケアの受け手が女性で、与え手が男性の場合には情緒的、感覚的に許容されにくい傾向がみられるとの報告があることから⁹⁾、具体的に「男性の女性に対するやさしさ」という設問で検討したところ、女性側は肯定的見方であったが、男性はむしろ否定的な見方をし、自らのやさしさに気付いていないのではないかと思われた。同時にそれは「女性の身体や心理は男性に理解出来ない」とする質問に、男性の半数が「そう思う」と肯定的な意見を有していることからもうかがい知ることが出来る。また「恥ずかしい」「リラックスできない」という設問では、「そう思う」とする考えが褥婦・助産婦に圧倒的に多かった。これは日本の出産が性は秘やかなものという文化風土に基づいており、これが助産職に対する伝統的な職業観に現在も根強く残っていると思われる。このことは文化風土が変化していくことによって、職業観が変わるという可能性を含み、今後の助産職のとらえかたも変わることを示唆している。医療の現場でも年々分娩を取り扱う産婦人科医が減少しており、同時に出産形態も施設内の管理分娩から家庭分娩を含む自然分娩への回帰現象も生じてきている。将来この様な変化の中で、助産職も大きく様変わりすることが予想される。

おわりに

10年前（昭和61年）にも宮城県内の助産婦に「助産士」導入の賛否を採り、当時の賛成者は僅か15%であった。それが今回は約2倍に増えている¹¹⁾。

ライフスタイルも変化し、性役割の意識も行動も刻々変化しており、制度的には男女雇用機会均等法や育児休業法が整備され、学校教育でも学習指導要領の改訂による家庭科の男女共修が実施されてきた。宮城県教育委員会でも小学生にジェンダーフリーのパンフレットを配布するなど新しいジェンダーアイデンティティの形成を期待し、男女の共生社会づくりを目指している¹⁷⁾。新しい時代の変化に対応した助産職像を追求すべき時代に入っていると思われる。

文 献

- 1) 社団法人日本看護協会：男性助産士について，職能集会検討資料，222-225，1997
- 2) 松本八重子：専門職助産婦の役割を再確認する，助産婦雑誌，48(4)，314-321，1994
- 3) 山崎裕二：新しい思想としての「助産士」，助産婦雑誌，50(7)，530-536，1996
- 4) 岩間 薫，今千恵子，今 千恵：青森県における「助産士」に関する意識調査，助産婦雑誌，50(7)，580-584，1996
- 5) 石田貞代：「助産士」議論の背景要因に関する研究，助産婦雑誌，50(7)，538-543，1996
- 6) ぐるーぷ・きりん報告集：ここからはじまる—アンケート集計結果，27，1993
- 7) ぐるーぷ・きりん：「助産婦さんをもっと知りたい」，6-7，1996
- 8) 池田公子，松田尚子，玉井道子，三村真智子，宮田明美，和田洋子，高橋美津子，四宮美左恵：男性助産士導入に関する調査（その6）一般男性が否定的傾向を示している助産士業務内容の分析，母性衛生，38(3)，366，1997
- 9) 山田昌弘：福祉のジェンダー，家族研究年報，17，2-14，1992
- 10) 母子保健の主なる統計：厚生省児童家庭局母子保健課，1996
- 11) 宮城県看護協会調査研究委員会：看護師の保健婦・助産婦免許取得についての意見調査，1987
- 12) 助産婦教育システム研究会：「助産婦資格の男子への対象拡大」に関する資料，10-31，1991
- 13) 全国助産婦教育協議会：「助産婦資格の男子への対象拡大」に関する調査，1991
- 14) 大林道子：助産婦の戦後，劉草書房，1989
- 15) 朝日新聞：ニュースの眼，男性助産婦—あなたはどうか考えますか？，1993年2月2日
- 16) 西海ひとみ：助産婦業務における男性の進出について，看護教育，34(7)，558-559，1993
- 17) 宮城県教育委員会：性に関する指導の手引—学級活動・ホームルーム活動指導資料一，1997